

瀬戸内国際芸術祭 2013 国吉康雄展 対話による鑑賞ギャラリーツアーの実践報告

岡山県立美術館
対話型鑑賞ツアーボランティアスタッフ
森 弥生

概略

2013年3月20日から始まった瀬戸内国際芸術祭 2013 (<http://setouchi-artfest.jp/>)。その拠点であるベネッセアートサイト直島には、今年も国内だけでなく世界各地からアートファンがやってきて、瀬戸内の穏やかな風景に点在する現代アートを楽しんでいる。2010年から始まったこの芸術祭は、ベネッセアートサイト直島代表の福武総一郎氏と先代の哲彦氏が、氏の郷土岡山市出身で第2次世界大戦中もアメリカで活動した国吉康雄の作品を蒐集してきたことが出発点となっている。

本文では、芸術祭開幕と同時に直島のベネッセハウスミュージアムで開催された国吉康雄展（～6月9日）会場で、3月20日～31日に渡って実践した対話による鑑賞ギャラリーツアーについて報告する。

そもそも

国吉康雄作品の福武コレクションは、ふだんは岡山県立美術館に寄託されていて、折々に展示されている。その岡山県立美術館では1998年から学校・美術館ボランティア・大学生が協働した対話による鑑賞教室を実施したことに始まり、2005年にアメリカ・アレナス氏プロデュースの「mite!岡山」を開催したりと、ボランティアによる対話型鑑賞を取り入れたツアーや学校団体対応などが継続的に行われてきた。月1回の定時対話型鑑賞ツアーを担当するボランティアスタッフの中には、2011～12年に京都造形芸術大学にてフィリップ・ヤノウィン氏を招聘して開催された「連続セミナーVTS」に参加した人もいる。

今回のギャラリーツアーのきっかけは、日本三名園の一つである後樂園の隣、国吉康雄生誕地の岡山市出石町が、2012年秋に国吉康雄作品を核とした「出石祭」を行うにあたって、町や有志の方々に国吉作品を知ってもらうための勉強会のお手伝いをツアーボランティアの一人が個人的に頼まれたことである。



2013年3月25日放送 NHK 岡山 ニュースもぎたて!から「もぎたてアート」よりキャプチャー

出石町のカフェや集会所で月に一回集まり、VTS の手法で国吉作品を鑑賞することで、画家に親しみ、祭りに関わっていく活動が受け入れられ、直島における国吉康雄の展覧会でも VTS を活用する方向で展示が企画された。

直島のベネッセハウスでは、もともとホテルスタッフが常設展示された現代アート作品についてギャラリーツアーを行っていた。1992年にホテル&ミュージアムができた当時、作家から直接話を聞くことのあるホテルスタッフもいて、制作裏話やトリビアなどを楽しめる、知識提供をメインとしたツアーだ。

しかし、開業以来のツアー・ノウハウも、展示作品がすべて国吉康雄作品に変わってしまうとお手上げ、ということで、2013年2月、ホテルスタッフ向けに国吉作品を使ってVTS研修を実施したところ、ぜひ取り入れたいと話が進み、その過程でVTSの奥深さに気付いたホテル側と相談して、3月20日のオープンからしばらくは、VTSの手法を学んだ岡山県立美術館のボランティア有志がギャラリーツアーを担当し、ホテルスタッフはその間、観察参与するとともに、毎晩20:00からのホテル宿泊者対象ギャラリーツアーで少しずつ実践していくこととなった。

ツアーの実際

日ごろから国吉康雄作品でトークしている岡山県立美術館の対話型鑑賞ツアーボランティアスタッフに声をかけたところ、有志8名が参加してくださった。このうち4名は、京都造形芸術大学で開催された「連続セミナーVTS」の修了生(片山真理、鳥越亜矢、森元洋子、森弥生)。また、東京国立近代美術館や倉敷市立美術館でボランティアをしている人もいる。開幕前後には、筑波大学で行われたアメリカ人国吉研究者によるシンポジウムに参加したり、アメリカ人国吉研究者からレクチャーを受けたりして学ぶ機会を持った。その上で、ツアー自体はVTSの基本に則って行い、お土産になるような情報提供はツアーの最後に入れる場合もあるという、臨機応変な姿勢で臨んだ。

原則2名(メイン・サブ)でツアーを担当し、毎日ツアー開始の2時間前までに会場に入り、シークエンスを作ったり模擬トークを行ったりしてツアーに備えた。45分間のツアー後には1時間程度の振り返りを行い、成果と課題はすぐにメールで流してメンバー全員で共有した。

ツアーの流れは以下の通り。

- ① 午後5時 フロント横でホテルスタッフによるベネッセハウスの説明(3分)
- ② ファシリテーターによるVTSについての説明など(1分程度)
- ③ VTSを用いたギャラリーツアー(40分前後)
- ④ 感謝とホテルスタッフからの諸連絡(1分)

※時間は食事やバスなどの関係で厳守※



まとめ

直島・瀬戸内国際芸術祭 2013 という祝祭空間に、VTSを用いたギャラリーツアーの実施を意識して構成された国吉康雄作品の展示を案内できたのは幸運だった。ベネッセハウスの変化に富んだ空間に展示された国吉康

雄作品を通して、一期一会の直島来訪者にどうしたら豊かな対話による新しいアートとの出会いをお土産として持って帰っていただけるかを考え、日々試行錯誤の連続だったが、エキサイティングな体験だった。

ツアー前にリサーチすると、国吉康雄を知らない方が 9 割、残りはコアな国吉ファンという、まさに美的発達段階の分布比率と一致する鑑賞者層を迎えて、迷った時は VTS の基本原理に立ち返りつつ、初対面の鑑賞者と国吉作品とを交互に「よくみて」「よく考えて」「よく聞いて」「丁寧にパラフレーズして」「そこで起こっていることを楽しむ」ように心がけたと思う。その中で気づいたことをいくつか挙げる。

- 最大 30 人にもなるグループで活発な鑑賞を行うには、事前の交流・リサーチを通して鑑賞者を把握し、対話型鑑賞するための親和的な関係を作ることが功を奏した。
- 直島でアートを鑑賞するという、非日常的な興奮を作品鑑賞につなぐには、グループの構成に合ったシーケンスを臨機応変に組むことが要求された。¹
- 題名や制作年はあくまでひとつの作品情報と捉え、コンテキスト言語を駆使して一面的な解釈に流れないように対話のバランスに気を配り、短い時間でも言い残した感じがなくなければならない。
- 充実した VTS 鑑賞が展開されていれば、話の流れの中で国吉康雄への理解を深めるのに役立つ情報を臨機応変に提供することもあり得る。トーク終了後にアメリカでの暮らしや画家としてのポジション、時代などをアナウンスすることで、鑑賞の余韻が続くのを邪魔しなかったようだ。
- 展示を理解して作品を選定し、シーケンスを考えてファシリテーションするまで、担当者に一貫したファシリテーションのイメージがあると、いかなる変奏にもむしろ楽しんで対応できる。

4 月以降のツアーをホテルスタッフに委ねてからは、どのようなツアーが展開されたかはさだかでない。3 回の事前研修で VTS を用いたツアーを実践することへの不安があった様で、ホテルスタッフ用の展示解説マニュアルが同時に編集されていたのはやむを得ないことと思う。

VTS でファシリテーションをやりきるには、大げさに言うと、今まで用いていた鑑賞メソッドを一度リセットして、作品と対峙する姿勢を正し、他者への眼差しと注意深い耳とを装着し直す必要がある。鑑賞の目的が、常に作品と鑑賞者の間に生成し続ける一連の思考プロセスであることを受け入れられた時、美的発達の階段を上って視界が開けるのだということを改めて実感した。

一度だけ鑑賞者として参加してみたところ、「この絵の中で何が起こっていますか？」と始まって、いくつかの発言を引き出したのち、作者の生活や時代背景などをきっちりと補足して、一定のイメージに収斂する手法に落ち着いており、45 分で波乱にとんだ作者の人生とその作品を網羅するツアーになっていた。初めての直島で、初めての国吉作品に接した他の鑑賞者には好評だったが、VTS に慣れた身には思考の出口に蓋をされるような思いに苛まれ続けたことを告白しよう。

2011～12 年、「連続セミナーVTS」を受講して、VTS 開発者のひとりであるフィリップ・ヤノウィン氏の警咳に接し、長年見よう見まねでやってきたことにくっきりとした輪郭を与えていただいたことが、今回の鑑賞ツアーを引き受けることにつながった。また、情熱をもって VTS を核とした教育を進め、セミナーを公開してくださった京都造形芸術大学の福のり子先生はじめスタッフの皆様は心より感謝したい。ささやかな還元だが、さらに学び、今後につなげていきたいと考えている。

¹ 現代美術を期待している鑑賞者が国吉康雄作品と出会うことの違和感を取り除くために、アートサイト直島のオープン経緯をホテルパーソンから行い、国吉作品がアートサイト直島の原点であったことを共有した。また、作品の持つ物語性・写実性・多義性が、鑑賞グループの年齢・アート体験などに応じた作品を選ぶことで、VTS を通じて、作品や画家をより身近に感じてもらう様につとめた。作品を身近に感じることで、改めて展示全体を見ようという意欲につながることができたと思う。